

### 3.5 宮古港

#### (1) 基本情報

宮古港(図-3.5.1)は岩手県沿岸のほぼ中央に位置し、リアス式海岸特有の地形を生かした天然の良港である。南部藩主利直公により藩の港として交易が開始され、藩船の建造および廻船問屋や海産物商による港の整備が進められた。江戸元禄年間には、宮古港は江戸と松前の中継港として栄え、大正時代に入ると、地元や県による港の埋め立て工事が行われ、船の接岸が便利になった。昭和2年には、第二種重要港湾に指定され、昭和4年には国の直轄事業として出崎ふ頭の建設に着手した。昭和8年、三陸津波が来襲により被災したが、ふ頭の修築工事が昭和12年に完成し、以来、近代港湾としての形態を整えてきた。昭和26年には国の重要港湾に指定され、昭和29年、1万トン岸壁の工事に着手、本格的な港湾整備が開始された。平成に入り、藤原防波堤や竜神崎防波堤を中心に整備が進められ、コンテナ貨物の定期航路が開設されるなど、重要港湾としての役割を果たしている<sup>6)</sup>。

#### (2) 地震動と津波

宮古港では強震観測施設が流失したため本震の強震記録は得られていないが、地震後に常時微動観測および余震観測が行われており、その結果から、主要な係留施設の立地する藤原地区では1Hz程度の成分の卓越した地震動であったと推察される<sup>29)</sup>。

宮古港の津波痕跡図を図-3.5.2に示す<sup>1)</sup>。図中の数値は、T.P. 表記の津波浸水高である。同図の結果によると、宮古港周辺では閉伊川河口の両岸における広い範囲で浸水が生じていることがわかり、宮古港藤原・神林地区(河口部右岸側)ではT.P. 8.0m以上(最高T.P. 9.0m)の津波浸水高さが確認されている。また、宮古港よりも南側の宮古湾奥部では津波痕跡高が10m以上(ただし津波到達時の推定天文潮位基準)となっている<sup>32)</sup>。

#### (3) 被災概況

宮古港は、製造業や漁業など、宮古地域の経済活動に不可欠な存在であり、また県内随一の景勝地「浄土ヶ浜」を遊覧する観光船発着所を有するとともに、県内港湾で唯一のディンギーヨット専用のヨットハーバーを有する観光・レクリエーション機能を合わせ持つ港湾であるが、東日本大震災により、それらの港湾施設に甚大な被害を受けた。

特に、竜神崎地区、出崎地区及び神林地区の防波堤、藤原公共ふ頭の上屋や荷役機械、並びに神林地区のマリ

ーナ「リアスハーバー宮古」の各施設は、津波により大きく損壊し、港湾利用や水産活動等に支障を来している状態にあった(付録2参照)。

関係者による迅速な復旧への取組みにより、震災から1ヶ月後の4月11日から魚市場が再開し、7月には出崎ふ頭に仮置かれていた災害廃棄物が移設され、宮古市の基幹産業である水産業復興の環境が回復する一方、竜神崎地区、出崎地区の防波堤損壊により静穏度が低下し、利用船舶の接岸等に支障となっていた。また、5月9日から一般貨物が、7月13日からコンテナ貨物が取り扱いを再開したものの、上屋機能は大型の仮設テントで代用し、荷役は150トン吊りクローラークレーン1台で行っている状況にあるなど、港湾機能は著しく低下した状態にあった<sup>7)</sup>。

#### (4) 復旧概要

これからの港湾を核とした宮古市の地域経済の回復はもとより、東北地方の力強い復興にとっても、宮古港の復旧・復興は極めて重要である。このため、地元関係者がこれまで以上に一丸となって復旧・復興に取り組んでいくこととし、復旧・復興の共通の方針として、

- I. 港湾機能の早期かつ適切な回復
- II. 地震・津波等に対する臨海部の防災機能の強化
- III. 市民・来訪者が憩える親水空間の確保

の3つを柱とする「宮古港復旧・復興方針」が策定された<sup>9)</sup>。

宮古港における港湾取扱貨物の復旧状況を図-3.5.3に示す。震災のあった翌平成23年4月の港湾取扱貨物量は、対平成22年同月比2%まで低下した。港湾利用企業の生産活動の再開や港湾施設の復旧が進み、取扱貨物量は平成24年で約28万トン(対平成22年比118%)となった。

#### (5) 外郭施設

宮古港における被災港湾施設(外郭施設、直轄分)を図-3.5.4に、被災施設一覧(外郭施設、直轄分)を表-3.5.1に示す。宮古港では、11箇所の外郭施設(直轄分)が被災した。出崎地区における深淺図を図-3.5.5に示す。被災した出崎防波堤の北側直線部の周辺において、津波によるものと思われる海底地形の変化が認められる。

被災状況として、竜神崎地区防波堤では、II区:5函、III区6函が転倒、マウンドの洗掘、施設全体が沈下した。出崎地区防波堤では、直線部においてケーソンがすべて転倒し、マウンドが洗掘され、施設の沈下が発生した。同防波堤ハネ部において、堤頭函1函が転倒し、マウン

ドが洗掘された。隅角函側のパラペットは流出し、施設全体が沈下していた。藤原地区防波堤では、堤頭部2函が転倒し、マウンドが洗掘され、施設が沈下していた。

神林地区北防波堤では、ケーソンがすべて転倒し、マウンドが洗掘され、施設全体が沈下していた。

竜神崎地区防波堤の復旧には、パラペットを重量コンクリートにより打設し、合力の作用位置を港外側に移動させて底面反力の低減を図った。また、港内側のマウンド法尻にカウンター盛土を設置し、偏心傾斜に対する抵抗モーメントを増加させることとした。出崎地区防波堤の復旧においては、被災前断面と同じケーソン式の構造とした。地震強度が小さく、円弧すべりや偏心傾斜による耐力作用比1.0を確保するため基礎マウンド幅が長くなっている。これら竜神崎防波堤、出崎防波堤、藤原防波堤の設計条件を表-3.5.2～表-3.5.4に示し、被災前後及び復旧後の断面図を図-3.5.6～図-3.5.10に示す。

一方、宮古港における被災港湾施設（外郭施設、補助分）を図-3.5.11～図-3.5.16に、被災施設一覧（外郭施設、補助分）を表-3.5.5に示す。宮古港では、18施設の外郭施設（補助分）が被災した。被災状況として、神林地区南防波堤では、防波堤全体が沈下し、基礎マウンドが洗掘された。高浜地区防波堤（南）では、防波堤全体が沈下し、基礎マウンドが洗掘されブロックが倒壊した。

#### (6)係留施設

被災港湾施設（係留施設、直轄分）を図-3.5.17に、また被災施設一覧（係留施設、直轄分）を表-3.5.6に示す。宮古港では、13施設の係留施設・直轄分が被災した。藤原第二埠頭-10.0m、藤原第一埠頭-12.0mの設計条件を表-3.5.7および表-3.5.8に、被災前後の断面図を図-3.5.12および図-3.5.13にそれぞれ示す。

被災状況として、出崎地区-4.0m物揚場では施設の沈下が発生した。藤原地区第二埠頭-10.0m岸壁では、施設の沈下、隅角部の上部工の崩壊、エプロンの損傷が発生した。藤原地区第一埠頭-12.0m岸壁では、施設が沈下し、エプロンにクラックが生じた。鉾ヶ崎地区-5.0m岸壁では沈下が生じた。鉾ヶ崎地区-5.0m岸壁の復旧は、岸壁背面をバックホーにて掘削し、岸壁の裏込材を軽量混合処理土に置き換えることにより、作用土圧の低減を図ることとした。

一方、被災港湾施設（係留施設、補助分）を図-3.5.20～図-3.5.25に、被災施設一覧（係留施設、補助分）を表-3.5.10に示す。宮古港では、24施設の係留施設（補助分）が被災した。

被災状況として、日立浜地区-4.5m岸壁(2)では、沈下が生じ、岸壁前面の海底面が洗掘され、その影響からか傾斜していた。藤原地区船着場では、沈下が生じた。神林地区東船揚場では、沈下が生じ、前面の海底面が洗掘され、ブロックが散乱した。高浜地区-2.0m物揚場(3)では、沈下が生じ、前面の海底面が洗掘され、ブロックが倒壊した。

#### (7)その他施設

宮古港の被災港湾施設（その他施設、補助分）を図-3.5.26に、被災施設一覧（係留施設、補助分）を表-3.5.10に示す。高浜地区では、海面上約9mの高さにあった木造家屋の全壊や、防潮堤に設置された陸閘（アルミ製）の変形などが報告されている<sup>32)</sup>。

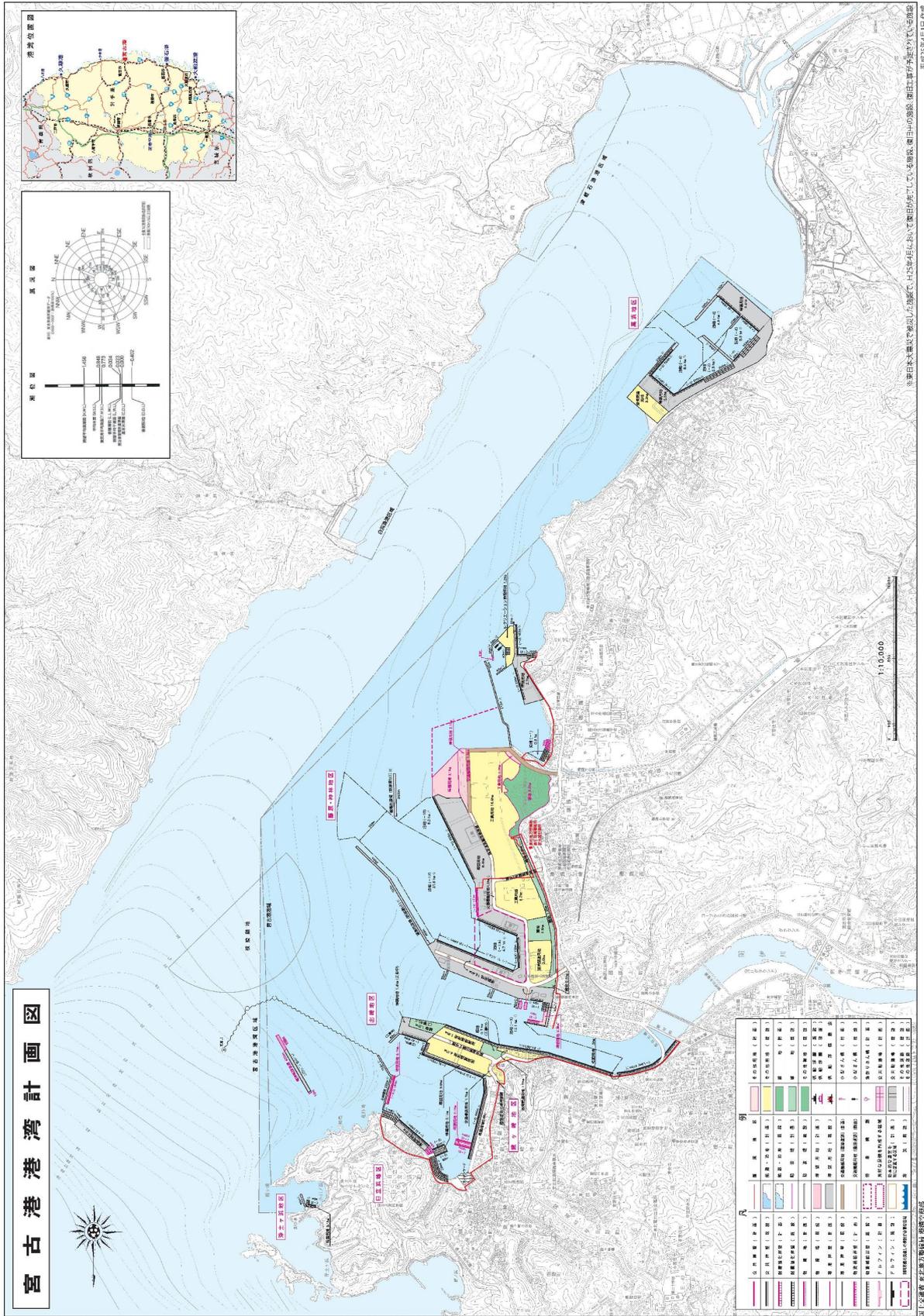


図-3.5.1 宮古港港湾計画図

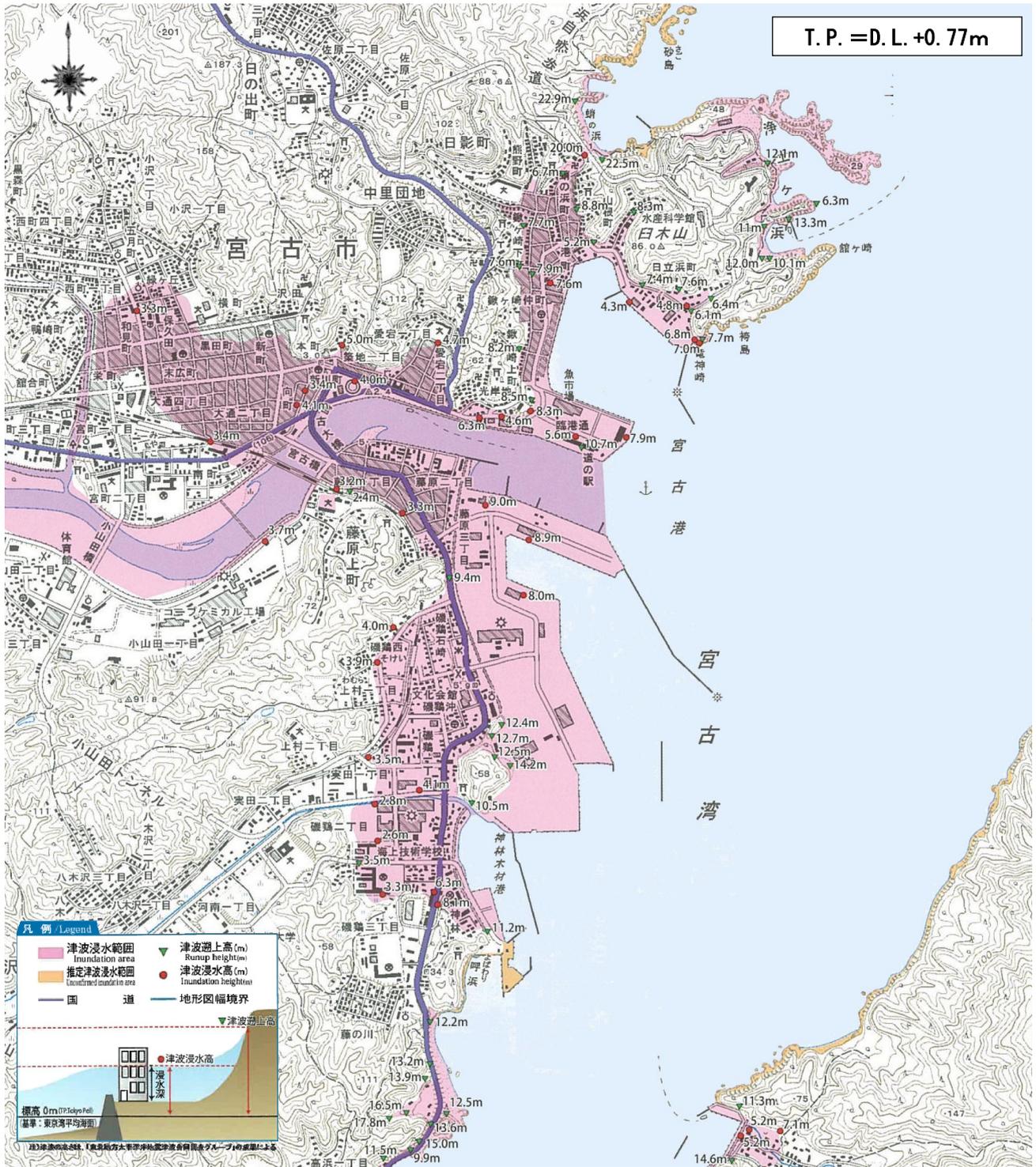


図-3.5.2 宮古港の津波痕跡図 (概要版) 1)

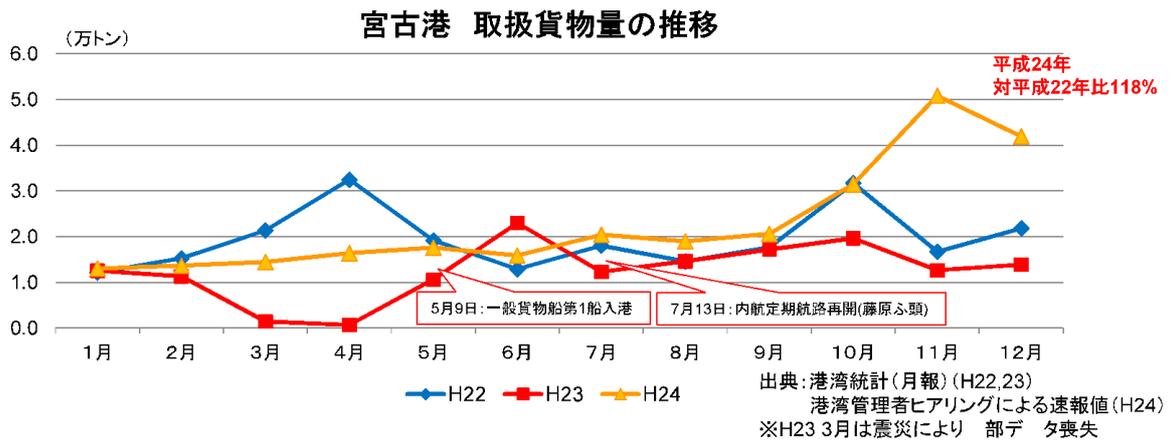


図-3.5.3 宮古港 港湾取扱貨物の復旧状況

宮古港 外郭施設（直轄分）

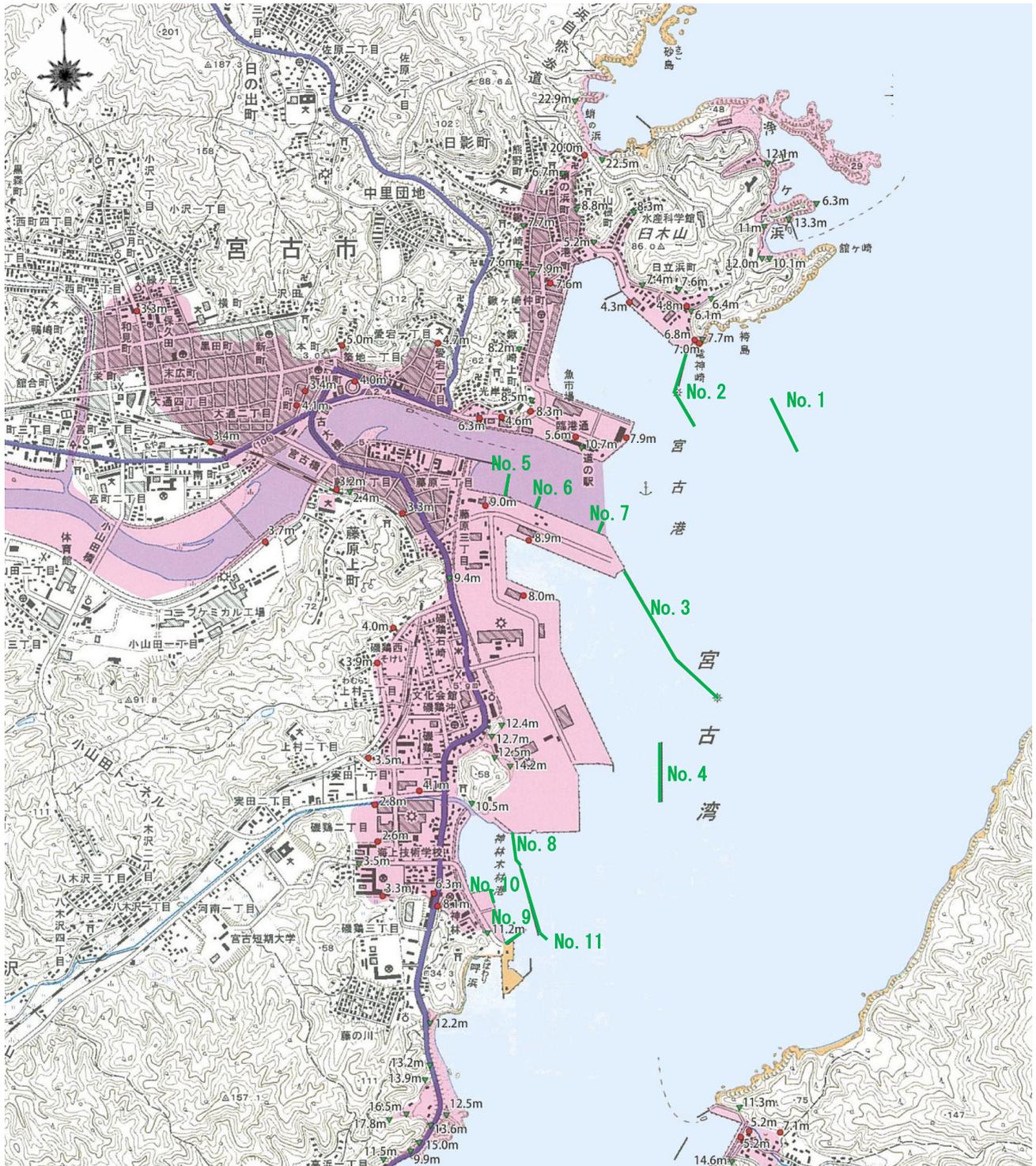


図-3.5.4 宮古港の被災港湾移設（外郭施設，直轄分）<sup>1)</sup>に加筆

表-3.5.1 宮古港の被災施設一覧(外郭施設,直轄分)

No.	施設名	完成年度	延長	構造形式	水深	天端高	設計震度	被災延長
1	竜崎地区_防波堤	—	Ⅱ区:142.04m	ケーソン式	—	Ⅱ区:DL+4.20m	—	142.04m
		—	Ⅲ区:152.49m			Ⅲ区:DL+4.70m		152.49m
2	出崎地区_防波堤	—	378.7m	ケーソン式	—	DL.+4.00m	—	378.7m
3	藤原地区_藤原防波堤	—	737.7m	ケーソン式	—	DL.+4.00m	—	737.7m
4	藤原地区_防波堤(Ⅱ)	—	263.7m	ケーソン式	—	DL.+4.00m	—	263.7m
5	藤原地区_心頭船溜防波堤	—	60.0m	ブロック式	—	DL.+4.00m	—	60.0m
6	藤原地区_藤原埠頭防波堤(第一波除)	—	50.5m	ブロック式	—	DL.+3.90m	—	50.5m
7	藤原地区_藤原埠頭防波堤(第二波除)	—	55.4m	ブロック式	—	DL.+3.50m	—	55.4m
8	藤原地区_木材港北防波堤	—	273.9m	ブロック式	—	DL.+6.00m	—	202.4m
9	藤原地区_木材港南防波堤	—	5区:335.81m	ブロック式 ケーソン式	—	5区:DL+6.00m	—	335.81m
			7区:82.09m			7区:DL+3.00m		82.09m
10	神林地区_北防波堤	—	50m	ケーソン式	—	DL.+5.80m	—	50m
11	藤原地区_防波護岸	—	656.7m	ブロック式	—	DL.+4.5m	—	656.7m

### 鯉ヶ崎地区 (H23. 4. 2～H23. 4. 7 測量)

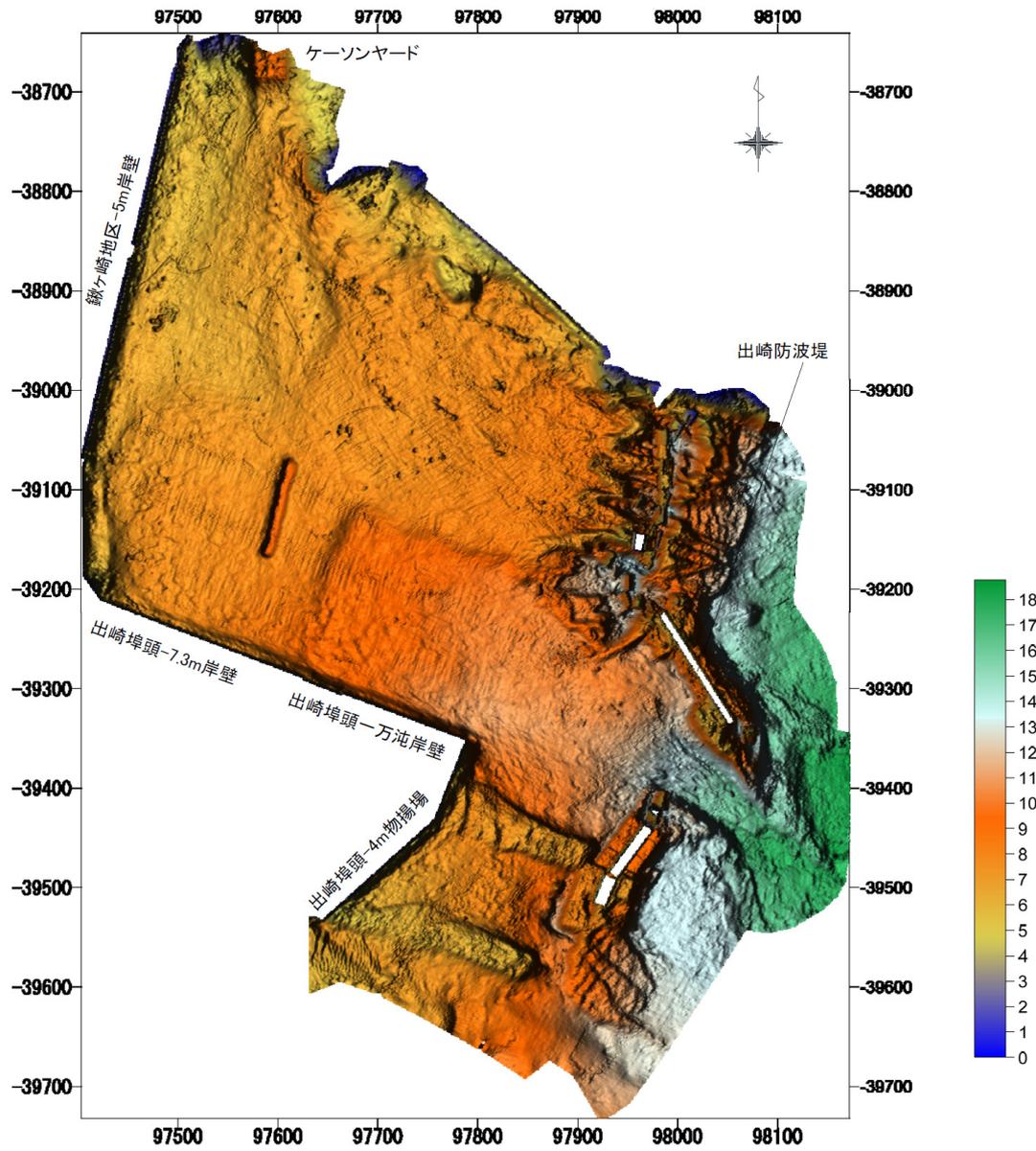
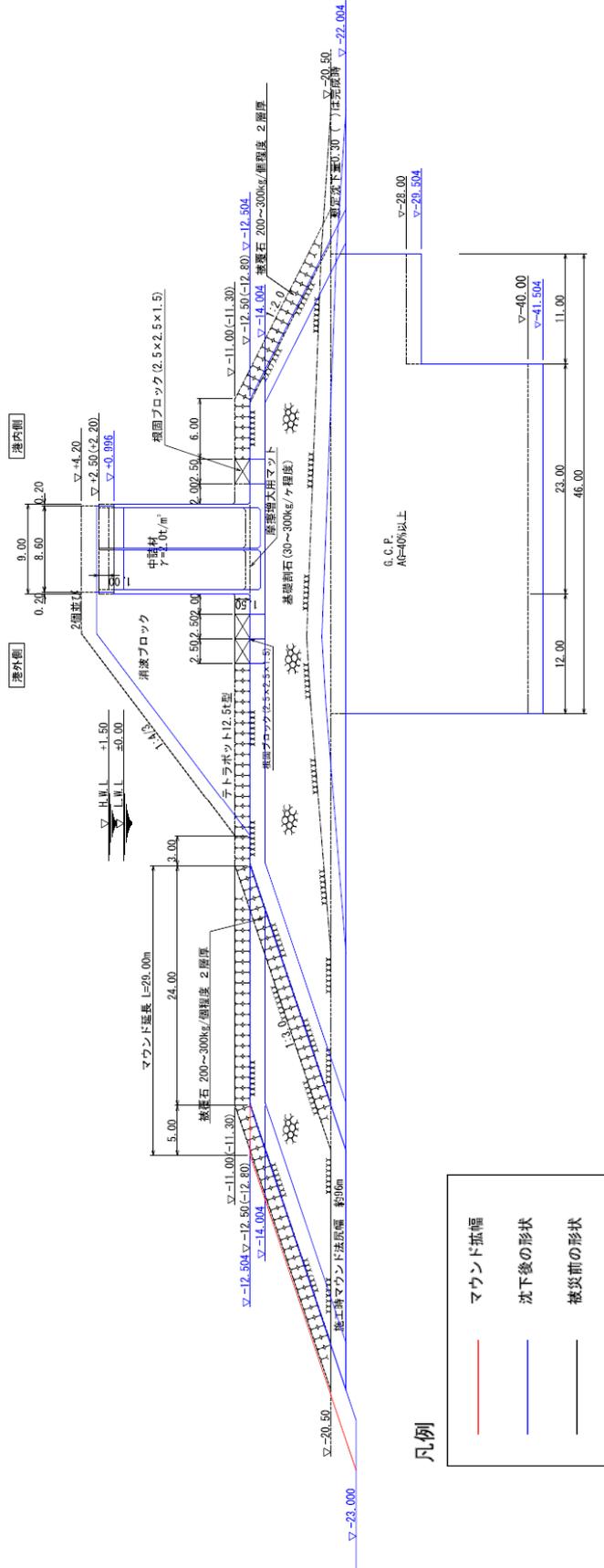


図-3.5.5 No.2 出崎地区\_防波堤カラー段彩図 (被災後)

表-3.5.2 No.1 竜神崎地区\_竜神崎防波堤の設計条件

Ⅱ 区

設計年度		平成15年度
設計延長		150.00m
設計供用期間		—
設計水深		—
潮位		HWL+1.50m LWL±0.00m
土質条件	地盤改良	G C P 改良(40%)
	$\gamma_t$	—
	$\phi$	—
	c	—
波浪条件		Hmax : +7.20m H <sub>1/3</sub> : 4.00m T (s) : 13.0 $\beta$ (°) : 0.0
設計震度		—
利用条件 (係留施設)		—



安定計算結果

円形すべり 安全率	完成時	マウンド拡張 L=5m
ピシヨップ法	L.W.L. 1.257 < 1.3	L.W.L. 1.306 > 1.3
修正フェレニウス法	1.228 > 1.2	1.289 > 1.2

図-3.5.6 No.1 竜神崎地区\_竜神崎防波堤 II-2 区断面図 (被災前・被災後)



表-3.5.3 No.2 出崎地区\_出崎防波堤の設計条件

直線部

設計年度	昭和4年度	
設計延長	225.00m	
設計供用期間	74年	
設計水深	-9.5m	
潮位	HWL+1.50m LWL±0.00m	
土質条件	地盤改良	—
	$\gamma t$	16.0kN/m <sup>3</sup>
	$\phi$	—
	c	I区：2.06・Z+32.08kN/m <sup>2</sup> (z=0,at DL-9.50m) II区：2.06・Z+13.02kN/m <sup>2</sup> (z=0,at DL-9.50m) III区：2.06・Z+2.45kN/m <sup>2</sup> (z=0,at DL-9.50m)
波浪条件	Hmax：+6.00m~+6.40m H <sub>1/3</sub> ：+3.70m T(s)：8.0 $\beta$ (°)：0.0	
設計震度	—	
利用条件(係留施設)	—	

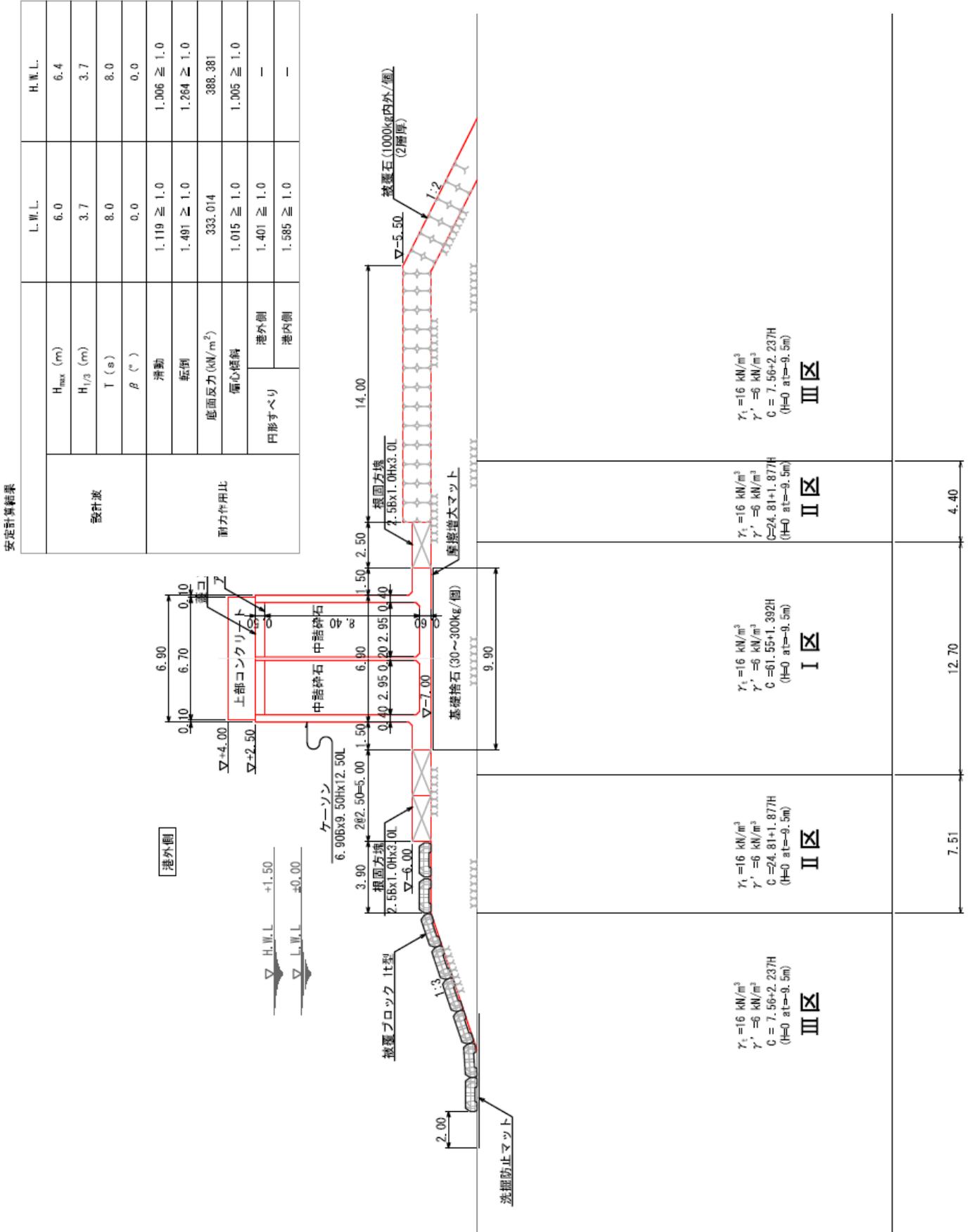


図-3.5.8 No.2 出崎地区\_出崎防波堤 直線部断面図 (復旧後)

(宮古港)

表-3.5.4 No.3 藤原防波堤の設計条件

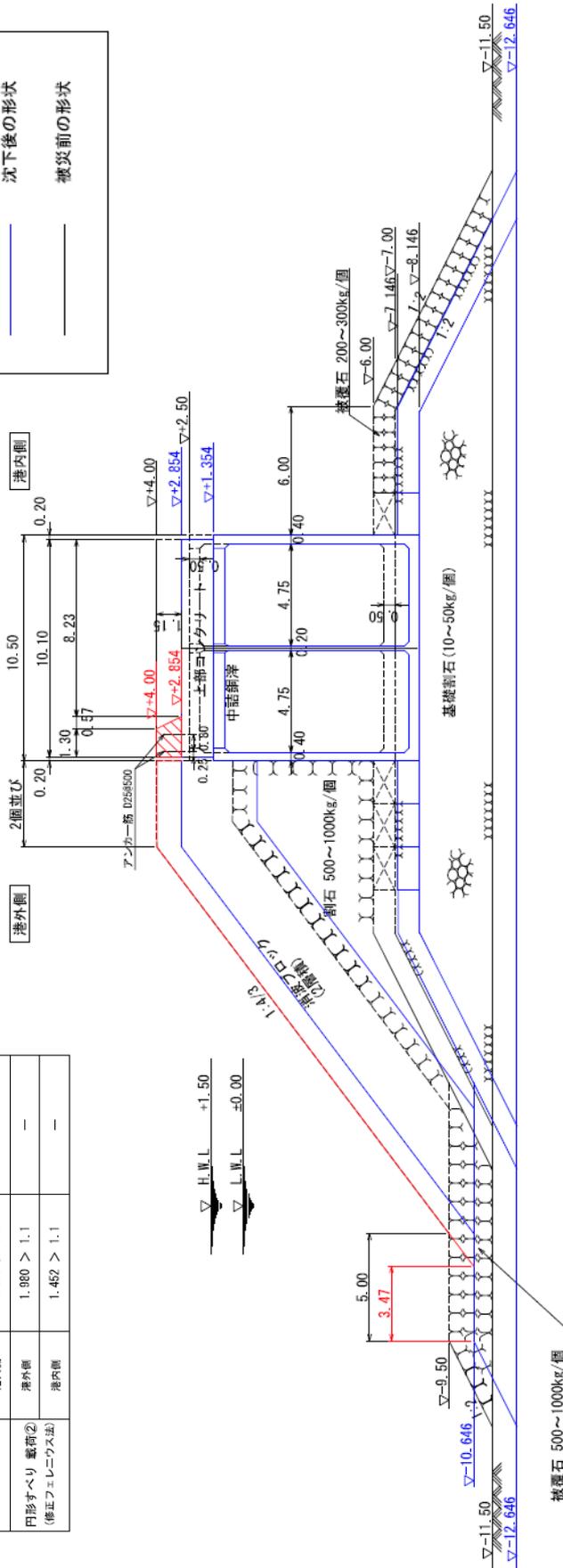
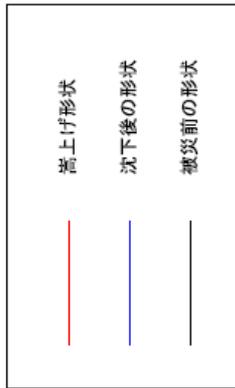
Ⅱ区、標準部、隅角部

設計年度	昭和53年度	
設計延長	667.65	
設計供用期間	—	
設計水深	—	
潮位	HWL+1.50m LWL±0.00m	
土質条件	地盤改良	—
	$\gamma t$	1.8t/m <sup>3</sup>
	$\phi$	30°
	c	—
波浪条件	Hmax : +8.00m H <sub>1/3</sub> : +4.40m T (s) : 11.0 $\beta$ (°) : 0.0	
設計震度	—	
利用条件 (係留施設)	—	

安定計算結果 (安全率)

設計数	嵩上げ時 (+4.0m)	
	L.W.L	H.W.L
$H_{max}$ (m)	8.0	
$H_{1/2}$ (m)	4.4	
T (sec)	11.0	
$\beta$	0°	
滑動	1.485 > 1.2	1.337 > 1.2
転倒	2.136 > 1.2	1.847 > 1.2
底面反力	$P_1$ (kN/m <sup>2</sup> )	390.04
	$b'$ (m)	6.963
確心傾斜	1.185 > 1.0	1.133 > 1.0
円形すべり 載荷① (ヒンヨップ法)	港外側	2.352 > 1.3
	港内側	1.790 > 1.3
円形すべり 載荷② (ヒンヨップ法)	港外側	2.371 > 1.3
	港内側	1.810 > 1.3
円形すべり 載荷① (修正フェレウス法)	港外側	1.956 > 1.1
	港内側	1.441 > 1.1
円形すべり 載荷② (修正フェレウス法)	港外側	1.960 > 1.1
	港内側	1.452 > 1.1

凡例



$\gamma' = 1.0 \text{ t/m}^3$   
 $\phi = 30^\circ$   
 $\delta = 15^\circ$

図-3.5.9 No.3 藤原地区\_藤原防波堤標準部断面図 (被災前・後・復旧後)

安定計算結果 (安全率)

	設計当初		次下層(仮定)		嵩上げ時(+4.0m)	
	L.W.L	H.W.L	L.W.L	H.W.L	L.W.L	H.W.L
H <sub>max</sub> (m)	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5
H <sub>1/3</sub> (m)	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
T (sec)	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0
β (°)	0°	0°	0°	0°	0°	0°
滑動	1.460 > 1.2	1.271 > 1.2	1.335 > 1.2	1.171 < 1.2	1.372 > 1.2	1.201 > 1.2
転倒	2.285 > 1.2	1.892 > 1.2	2.021 > 1.2	1.704 > 1.2	2.046 > 1.2	1.719 > 1.2
F <sub>1</sub> (kN/m <sup>2</sup> )	326.54	348.56	339.42	368.38	347.27	378.88
b' (m)	8.262	6.885	7.395	6.003	7.848	6.405
偏心係数	1.42 > 1.0	1.35 > 1.0	1.37 > 1.0	1.31 > 1.0	1.36 > 1.0	1.29 > 1.0
港外側	1.28 > 1.1	—	1.33 > 1.1	—	1.27 > 1.1	—
港内側	1.27 > 1.1	—	1.31 > 1.1	—	1.25 > 1.1	—

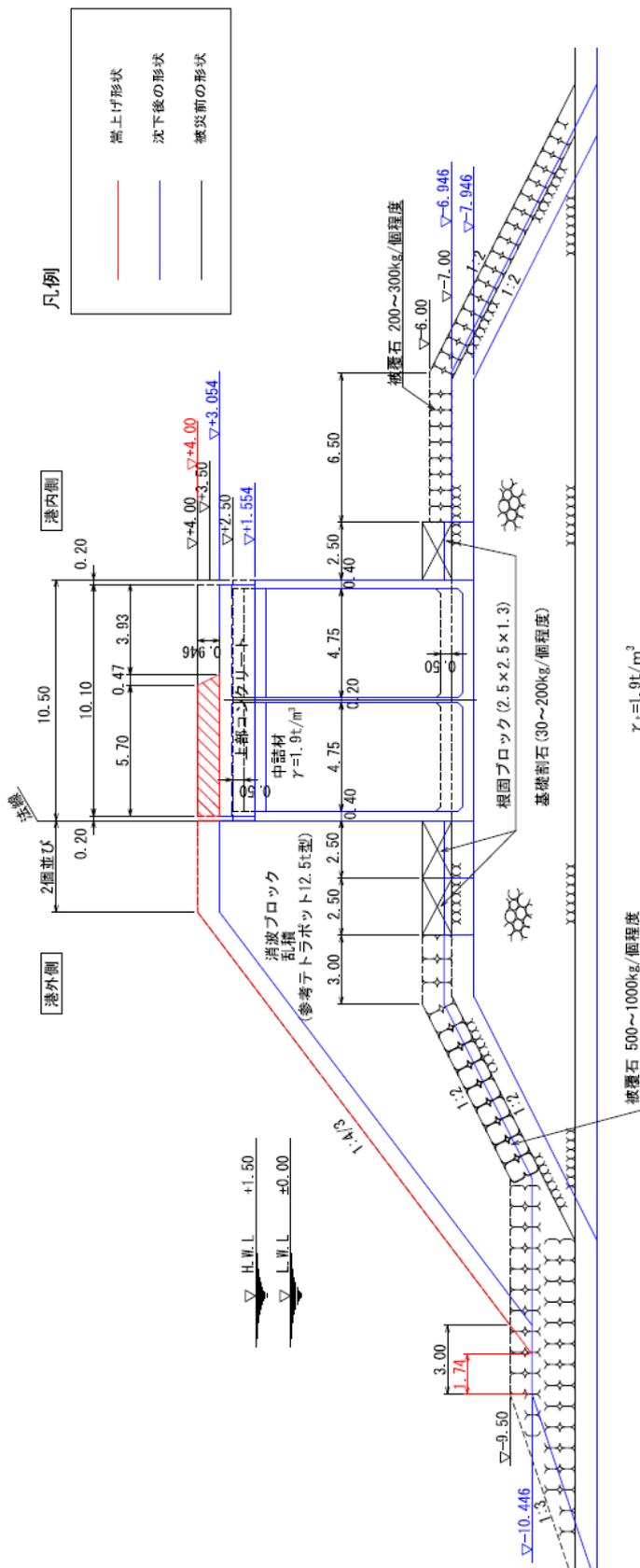


図-3.5.10 No.3 藤原地区\_藤原防波堤 延長部断面図 (被災前・後・復旧後)

### 宮古港 外郭施設 (補助分)

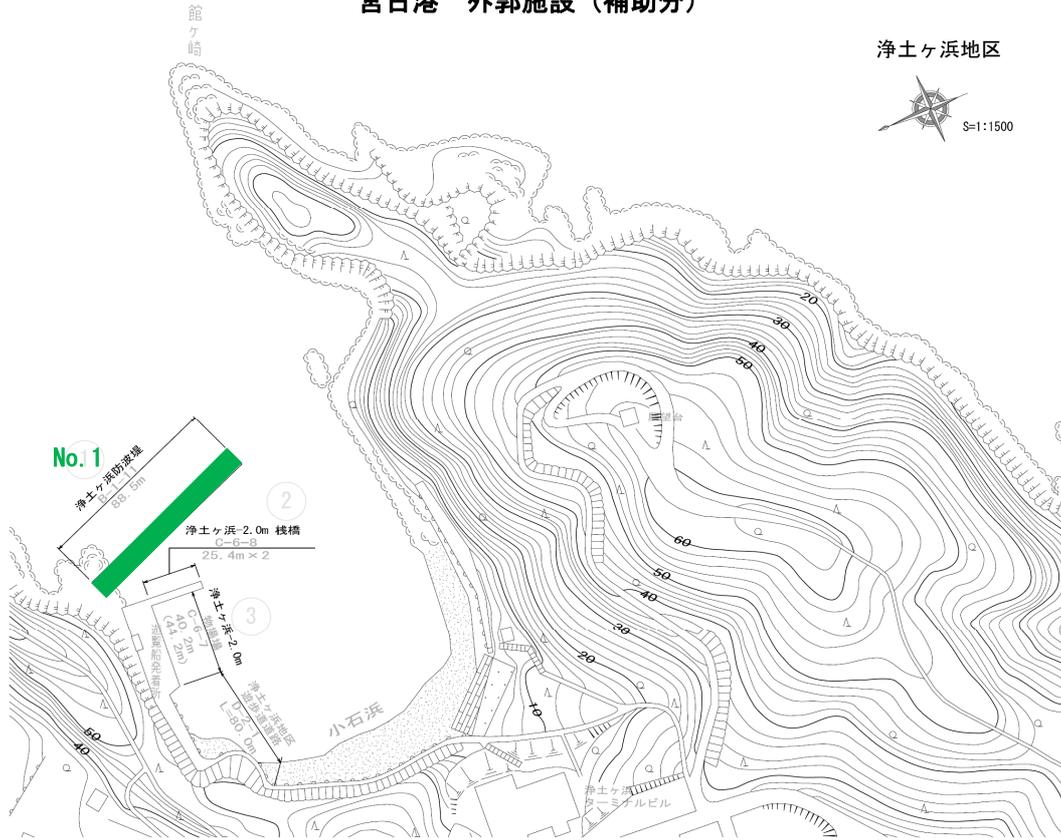


図-3.5.11 宮古港の被災港湾施設\_浄土ヶ浜地区 (外郭施設, 補助分)

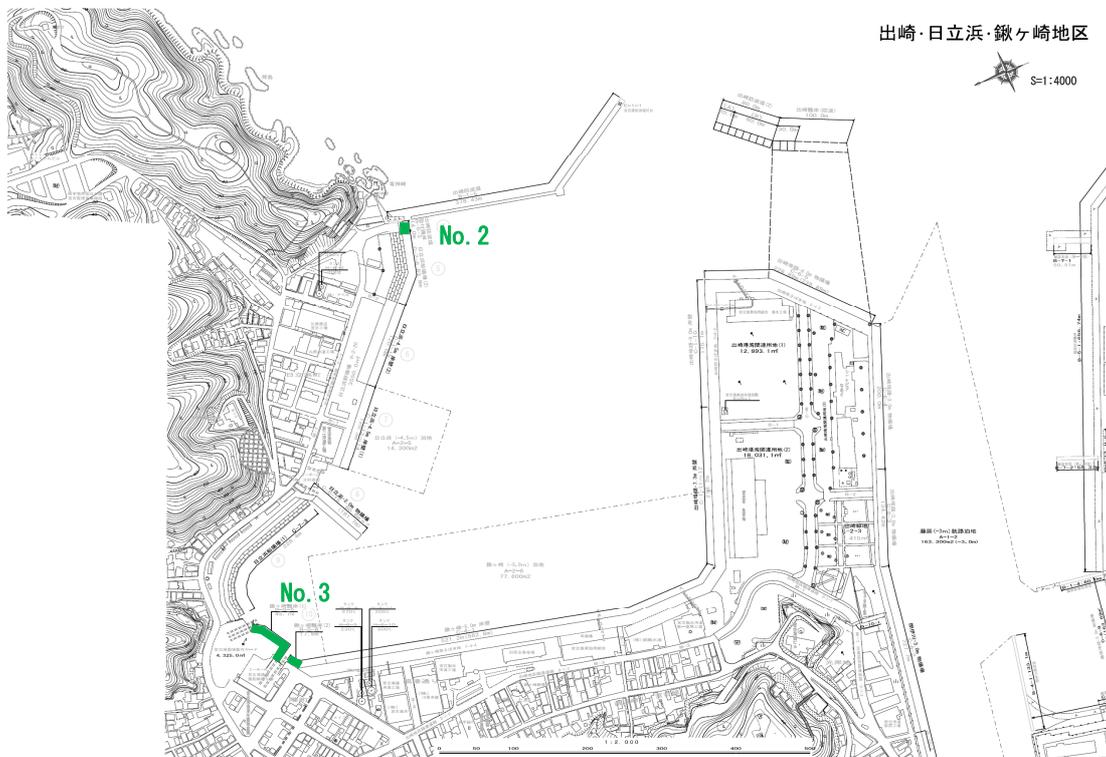


図-3.5.12 宮古港の被災港湾施設\_出崎・日立浜・鉾ヶ崎地区 (外郭施設, 補助分)

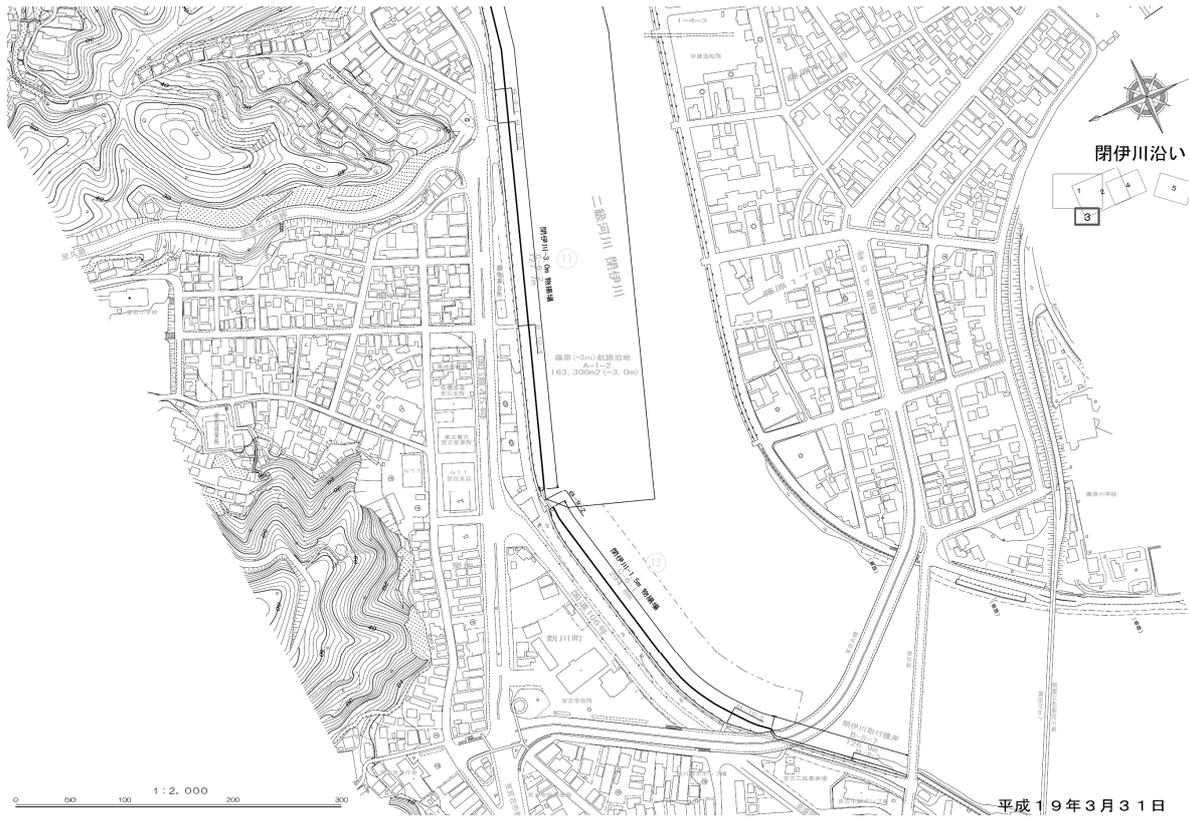


図-3.5.13 宮古港の被災港湾施設\_開伊川沿い (外郭施設, 補助分)

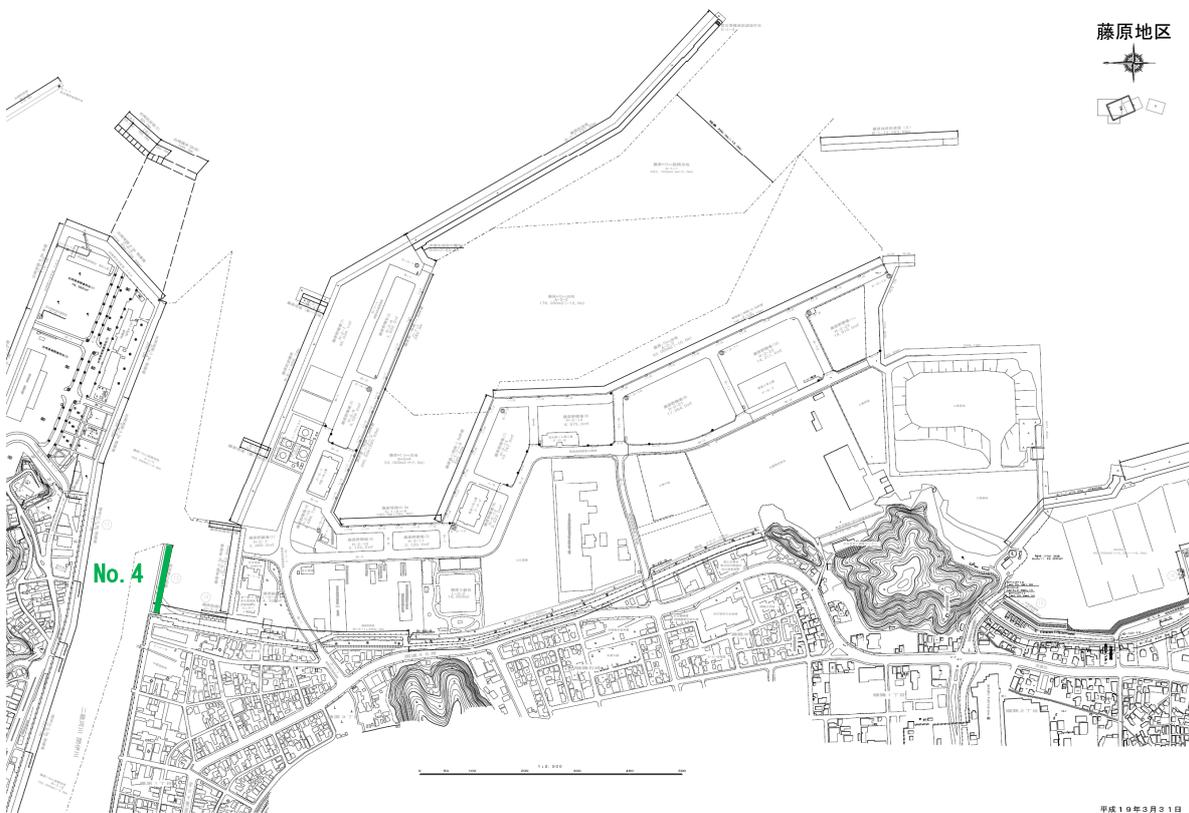


図-3.5.14 宮古港の被災港湾施設\_藤原地区 (外郭施設, 補助分)

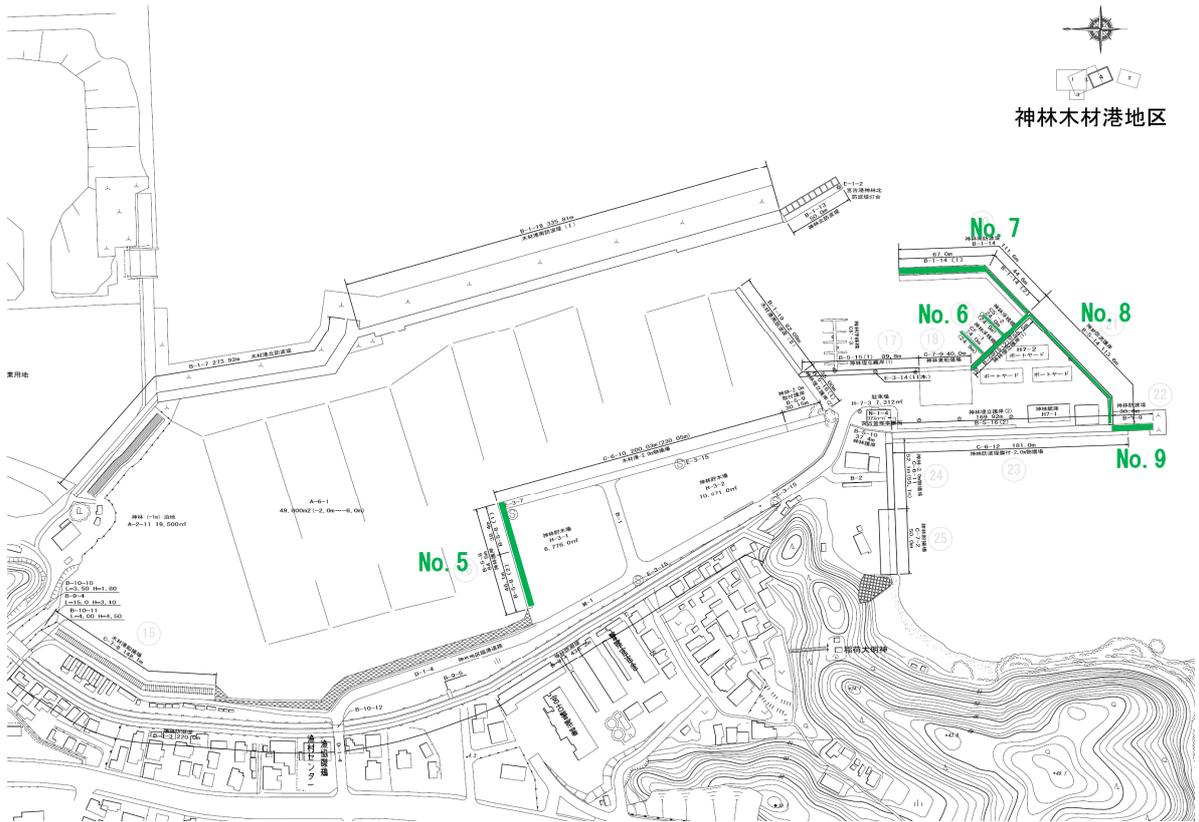


図-3.5.15 宮古港の被災港湾施設\_神林木材港地区 (外郭施設, 補助分)

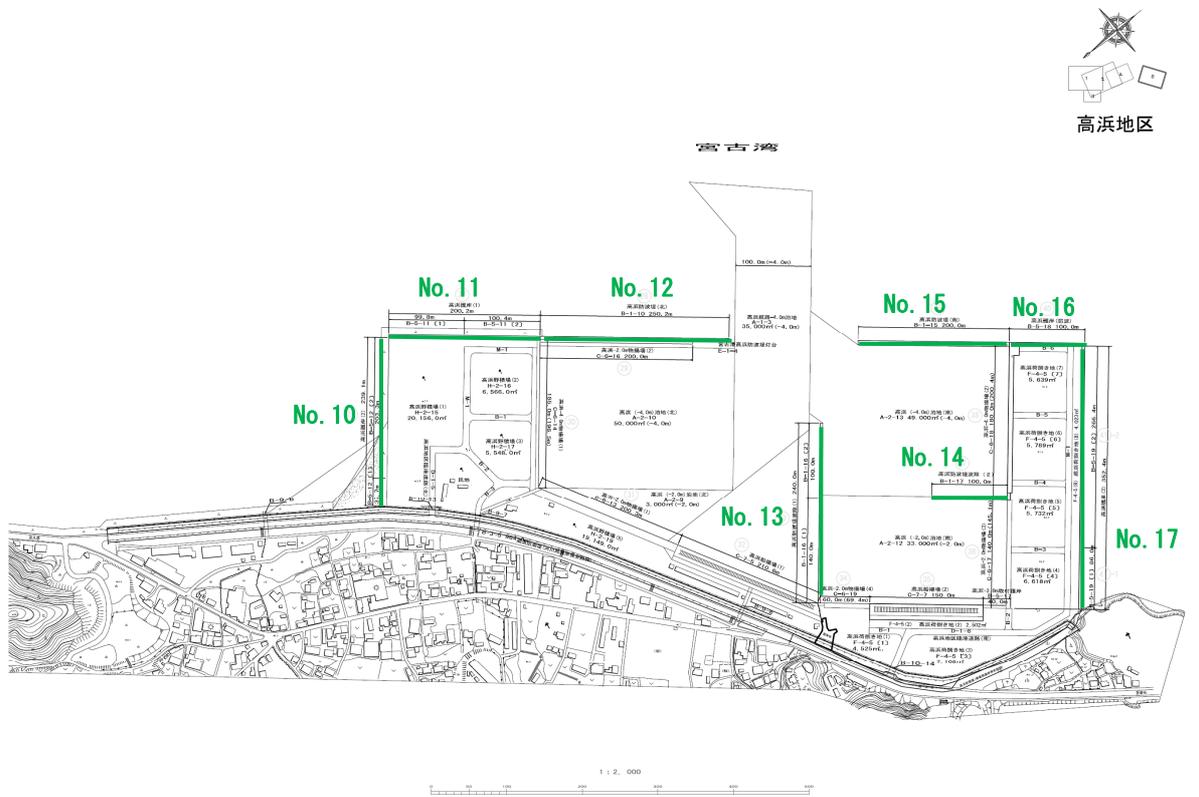


図-3.5.16 宮古港の被災港湾施設\_高浜地区 (外郭施設, 補助分)

(宮古港)

表-3.5.5 宮古港の被災施設一覧（外郭施設，補助分）

No.	施設名	完成年度	延長	構造形式	水深	天端高	設計震度	被災延長
1	浄土ヶ浜地区_防波堤	昭和48年度	88.5	ケーソン式	—	+4.50	—	88.5
2	出崎地区_防波堤取付護岸	平成7年度	14.0	ブロック張式	—	+2.50	—	14.0
3	鎌ヶ崎地区_護岸（1）（2）	—	63.3	ブロック積式	—	—	—	63.3
4	閑伊川_導流堤	—	133.1	ブロック積式	—	+3.30	—	133.1
5	神林地区_護岸	—	84.5	ブロック積式	—	+2.50	—	84.5
6	神林地区_埋立護岸	平成10年度	148.4	直立消波ブロック積式	—	+2.40	—	148.4
7	神林地区_南防波堤	平成10年度	111.6	直立消波ケーソン式	—	+5.00	—	111.6
8	神林地区_護岸防波	平成10年度	113.6	直立消波ブロック積式	—	+4.00	—	113.6
9	神林地区_防波堤	昭和50年度	30.8	消波ブロック被覆ケーソン式	—	+3.80	—	30.8
10	高浜地区_護岸（2）	昭和52年度	239.1	ブロック積式	—	+3.50	—	239.1
11	高浜地区_護岸（1）	昭和54年度	200.2	ブロック積式	—	+3.50	—	200.2
12	高浜地区_防波堤（北）	昭和54年度	250.2	直立消波ブロック積式	—	+3.00	—	250.2
13	高浜地区_防波堤波除（1）	平成12年度	240.0	直立消波ブロック積式	—	+2.00	—	240.0
14	高浜地区_防波堤波除（2）	平成12年度	100.0	直立消波ブロック積式	—	+2.00	—	100.0
15	高浜地区_防波堤（南）	平成12年度	200.0	直立消波ブロック積式	—	+3.90	—	200.0
16	高浜地区_護岸（防波）	平成7年度	100.0	直立消波ブロック積式	—	+3.90	—	100.0
17	高浜地区_護岸（3）-2	平成10年度	266.4	控え杭矢板式	—	+2.50	—	266.4
	高浜地区_護岸（3）-1		86.0	ブロック積式	—	+2.50	—	86.0

### 宮古港 係留施設 (直轄分)

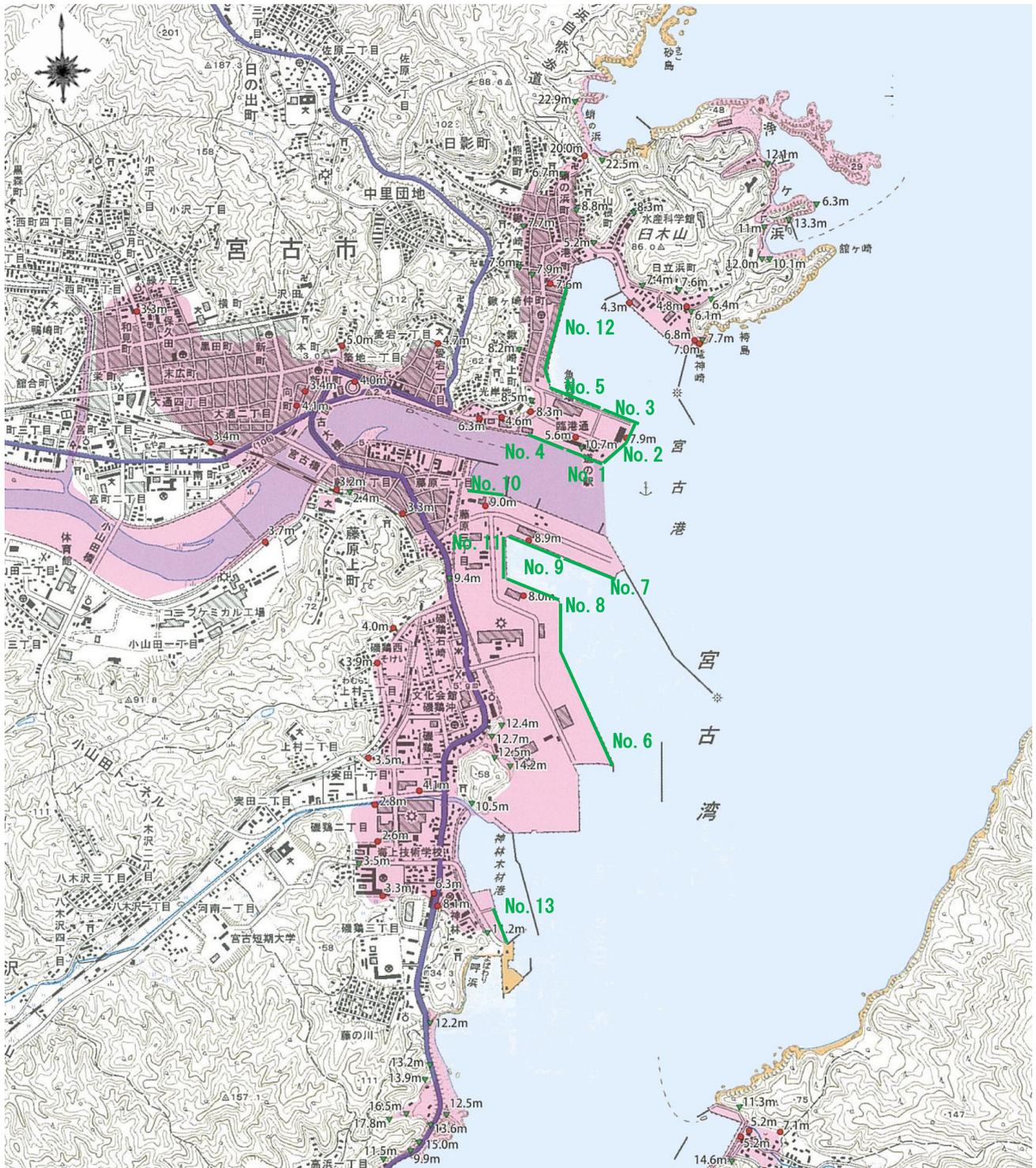


図-3.5.17 宮古港の被災港湾移設 (係留施設, 直轄分) 1)に加筆

表-3.5.6 宮古港の被災施設一覧（係留施設，直轄分）

No.	施設名	完成年度	延長	構造形式	水深	天端高	設計震度	被災延長
1	出崎地区_-3.0m物揚場	—	328.0m	矢板式	-3.0m	D.L.+2.00m	0.10	328.0m
2	出崎地区_-4.0m物揚場	—	75.2m	重力式	-4.0m	D.L.+2.50m	0.10	75.2m
3	出崎地区_一万屯岸壁	—	175.1m	重力式	-9.0m	D.L.+2.50m	0.10	175.1m
4	出崎地区_-7.3m岸壁	—	218.7m	重力式	-7.3m	D.L.+2.50m	0.10	218.7m
5	藤原地区_第二埠頭-10.0m岸壁	—	800.24m	矢板式	-10.0m	D.L.+2.49m	0.10	800.24m
6	藤原地区_第一埠頭-12.0m岸壁	—	240.0m	矢板式	-12.0m	D.L.+2.37m	0.10	240.0m
7	藤原地区_第二埠頭-7.5m岸壁	—	260.11m	矢板式	-7.5m	D.L.+2.18m	0.05	260.11m
8	藤原地区_第一埠頭-7.5m岸壁	—	260.11m	矢板式	-7.5m	D.L.+2.49m	0.05	260.11m
9	藤原地区_-3.0m物揚場	—	145.0m	ブロック式	-3.0m	D.L.+2.50m	0.05	145.0m
10	藤原地区_第一埠頭-4.5m岸壁	—	192.4m	矢板式	-4.5m	D.L.+2.51m	0.05	192.4m
11	鎌ヶ崎地区_-5.0m岸壁	—	562.6m	A区：栈橋式 B区：矢板式	-5.0m	D.L.+2.30m	0.05	562.6m
12	木材港_物揚場 (-2m)	—	230.05m	ブロック式	-2.0m	D.L.+2.00m	0.10	230.05m

表-3.5.7 No.5 藤原地区\_藤原第二埠頭-10.0m 岸壁の設計条件

設計年度		昭和63年度
設計延長		740.04m
設計供用期間		—
設計水深		-10.0m
潮位		HWL+1.50m LWL±0.00m
土質条件	地盤改良	—
	$\gamma t$	1.8t/m <sup>3</sup>
	$\phi$	27.5°
	c	—
波浪条件		—
設計震度		0.1
利用条件（係留施設）		—

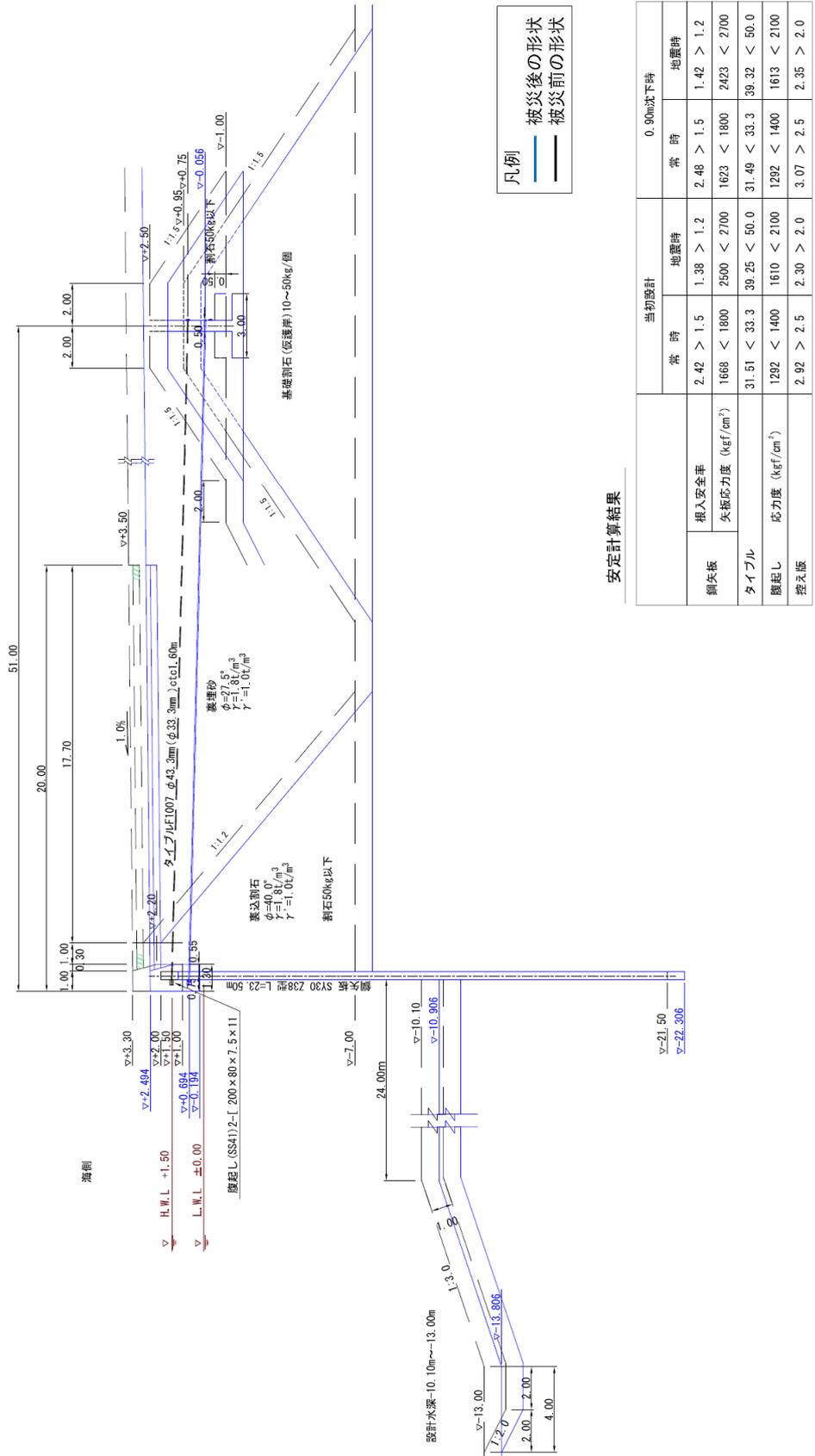
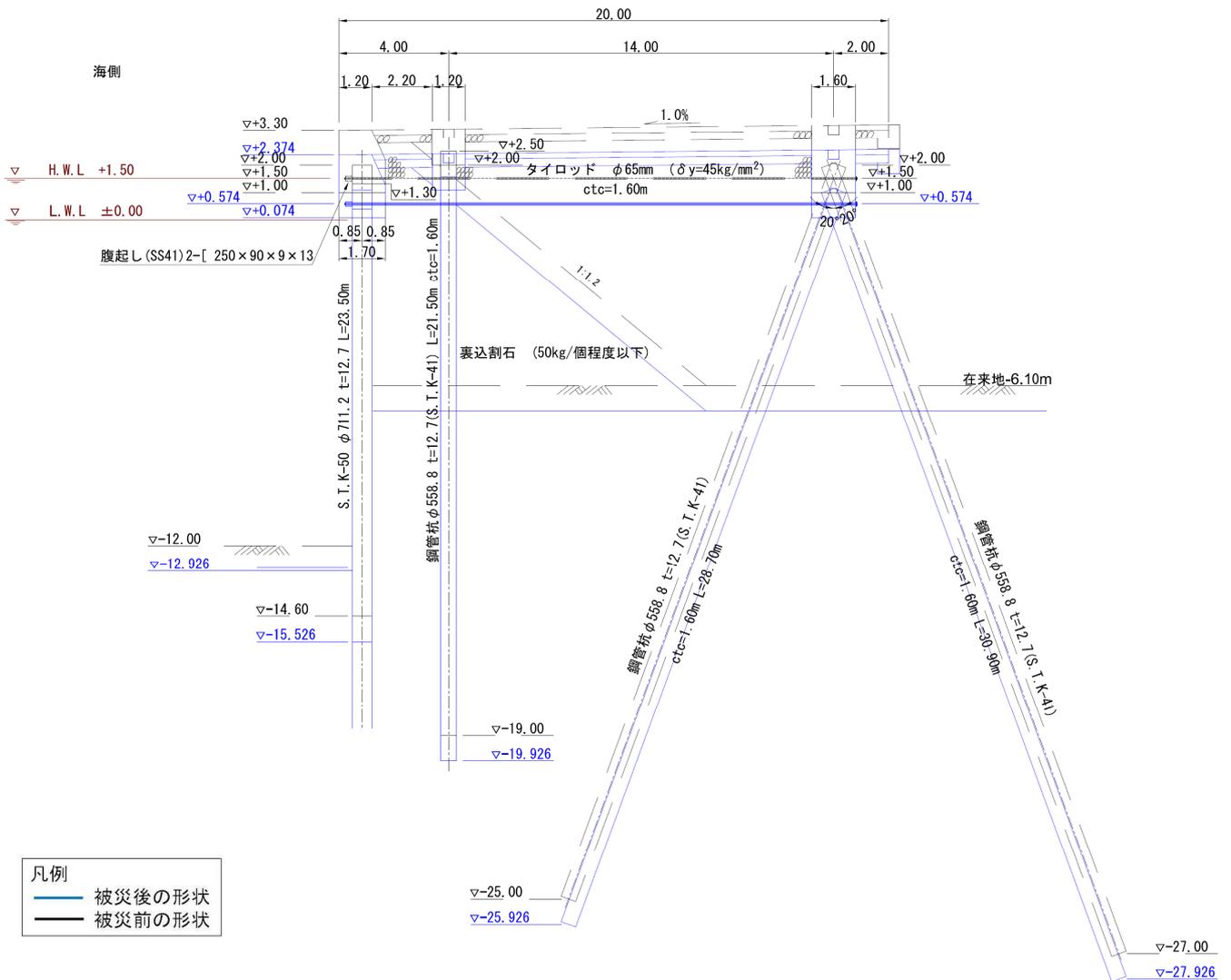


図-3.5.18 No. 5 藤原地区\_藤原第二埠頭-10.0m 岸壁 断面図 (被災前・後)

表-3.5.8 No.6 藤原地区\_藤原第一埠頭-12.0m 岸壁の設計条件

設計年度	昭和50年度	
設計延長	240.00m	
設計供用期間	—	
設計水深	-12.0m	
潮位	HWL+1.50m LWL±0.00m	
土質条件	地盤改良	—
	$\gamma t$	1.8t/m <sup>3</sup>
	$\phi$	30.0°
	c	—
波浪条件	—	
設計震度	0.1	
利用条件 (係留施設)	—	



安定計算結果

		当初設計		0.65m沈下時		
		常時	地震時	常時	地震時	
鋼管矢板	根入安全率	1.98 > 1.5	1.28 > 1.2	2.03 > 1.5	1.29 > 1.2	
	矢板応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1628 < 1800	1957 < 2700	1728 < 1800	2093 < 2700	
タイロッド	応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1449 < 1800	1650 < 2700	1454 < 1800	1657 < 2700	
腹起し	応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	1067 < 1400	1215 < 2100	1072 < 1400	1220 < 2100	
控組杭	圧縮応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	551 < 1400	574 < 2100	552 < 1400	575 < 2100	
		引張応力度 (kgf/cm <sup>2</sup> )	212 < 1400	261 < 2100	213 < 1400	262 < 2100
	支持力	押込杭	2.56 > 2.5	2.46 > 1.5	2.56 > 2.5	2.45 > 1.5
		引抜杭	3.12 > 3.0	2.54 > 2.5	3.10 > 3.0	2.52 > 2.5

図-3.5.19 No.6 藤原地区\_藤原第一埠頭-12.0m岸壁断面図(被災前・後)



図-3.5.20 宮古港の被災港湾施設\_浄土ヶ浜地区（係留施設，補助分）

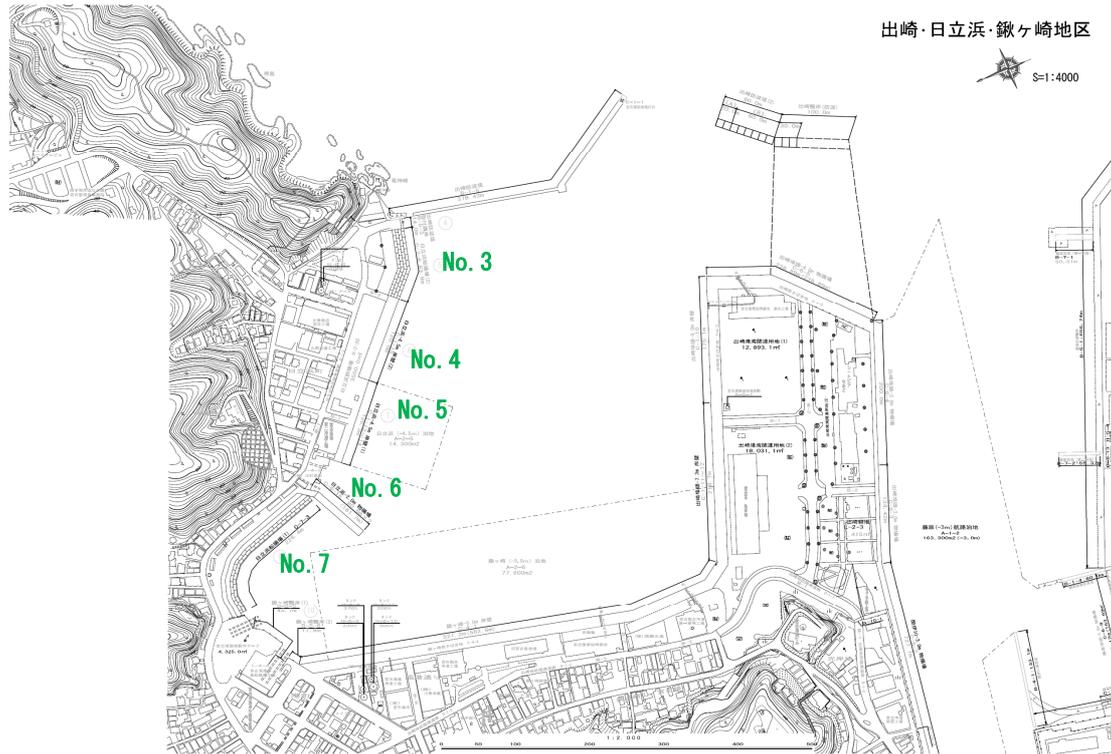


図-3.5.21 宮古港の被災港湾施設\_出崎・日立浜・鉾ヶ崎地区 (保留施設, 補助分)

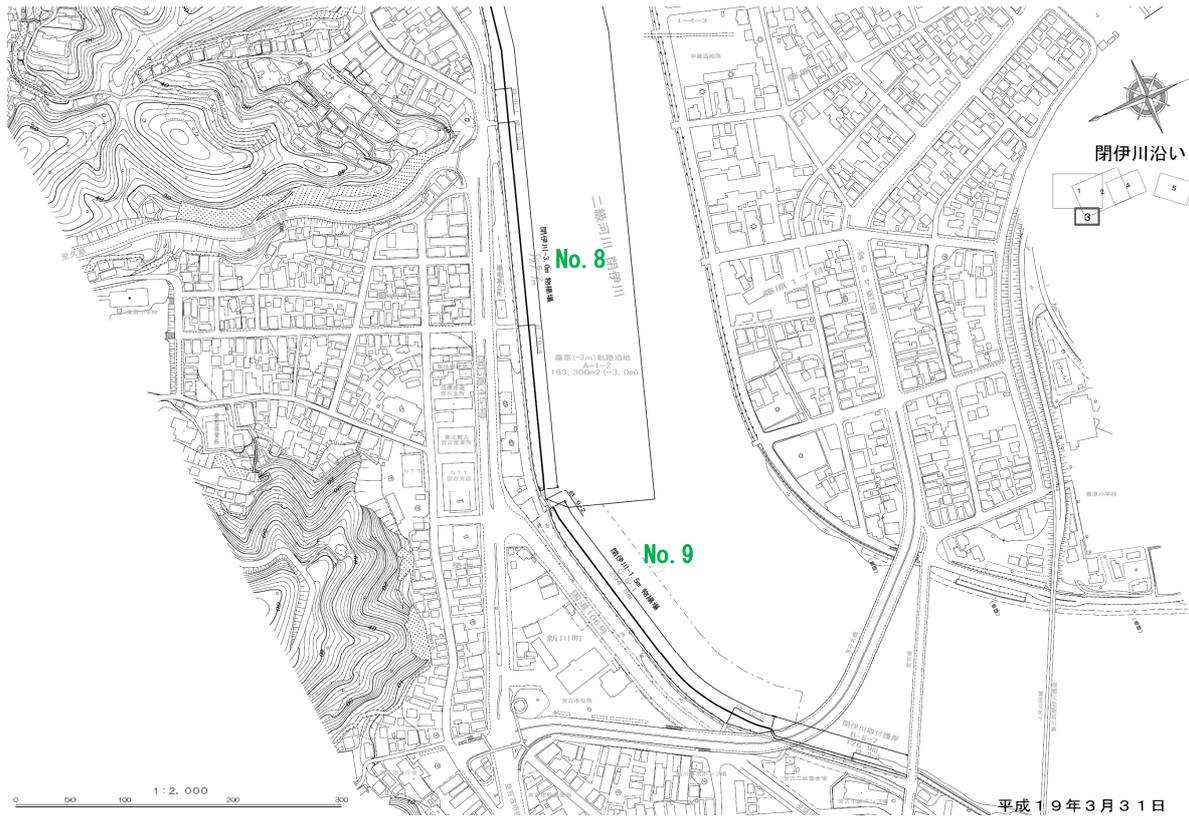


図-3.5.22 宮古港の被災港湾施設\_閉伊川沿い (係留施設, 補助分)

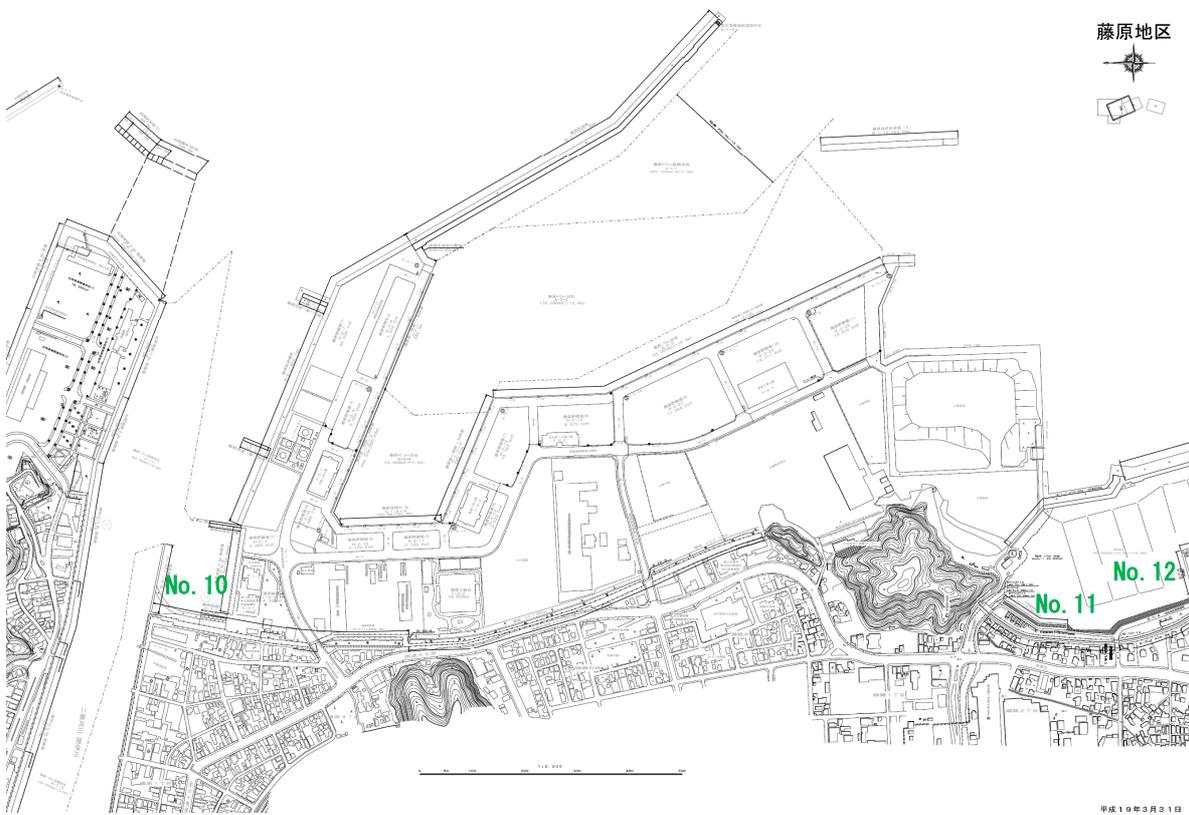


図-3.5.23 宮古港の被災港湾施設\_藤原地区 (係留施設, 補助分)

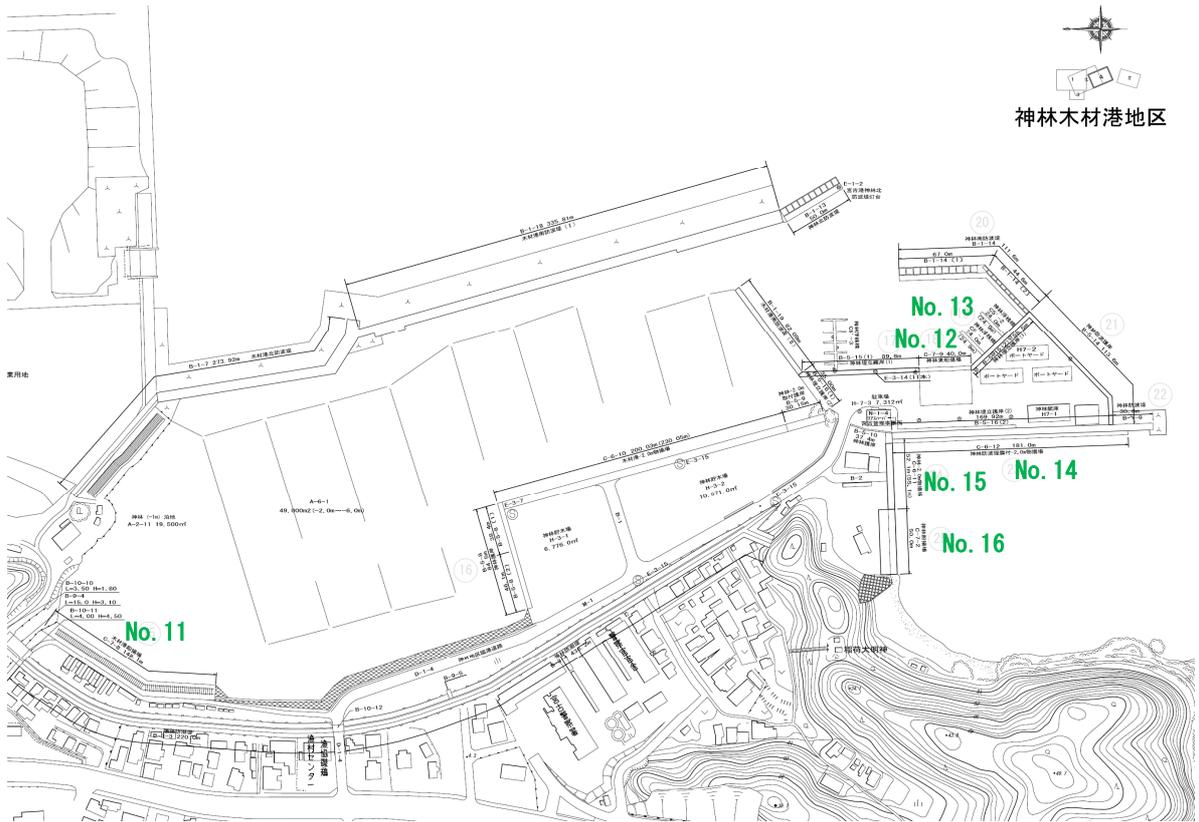


図-3.5.24 宮古港の被災港湾施設\_神林木材港地区 (係留施設, 補助分)

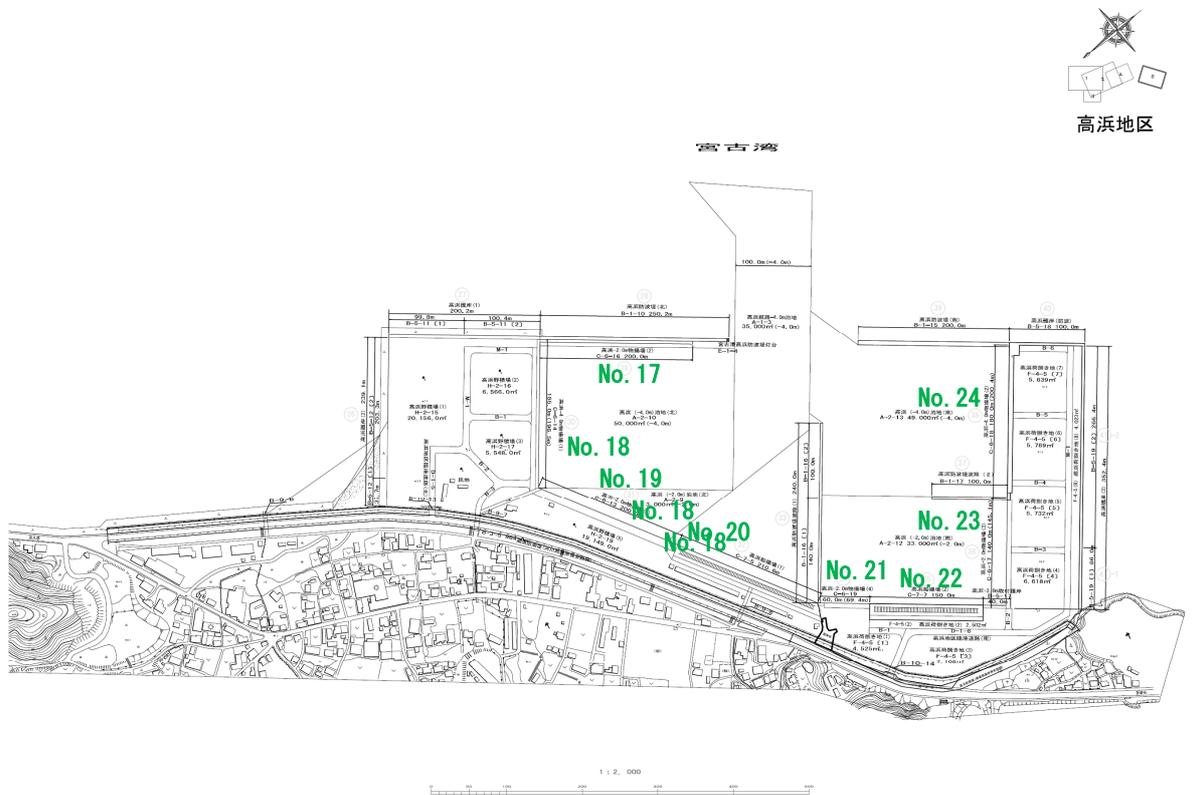


図-3.5.25 宮古港の被災港湾施設\_高浜地区 (係留施設, 補助分)

表-3.5.9 宮古港の被災施設一覧（係留施設，補助分）

No.	施設名	完成年度	延長	構造形式	水深	天端高	設計震度	被災延長
1	浄土ヶ浜地区_-2.0m栈橋	昭和49年度	25.4	ブロック積式	-2.00m	+2.30m	—	25.4
2	浄土ヶ浜地区_-2.0m物揚場	昭和49年度	40.2	ブロック積式	-2.00m	+2.30m	—	40.2
3	日立浜地区_船揚場（2）	平成15年度	100	ブロック張式	-0.50m	+2.50m	—	100.0
4	日立浜地区_-4.5m岸壁（2）	平成 8年度	120	ブロック積式	-4.50m	+2.50m	—	120.0
5	日立浜地区_-4.5m岸壁（1）	昭和48年度	120.3	ブロック積式	-4.50m	+2.50m	—	120.3
6	日立浜地区_-4.5m物揚場	昭和61年度	80	直立消波ブロック積式	-2.00m	+2.00m	—	80.0
7	日立浜地区_船揚場（1）	昭和59年度	237	ブロック張式	-1.00m	+2.50m	—	237.0
8	閑伊川_-3.0m物揚場	昭和53年度	727.7	矢板式	-3.00m	+2.30m	—	727.7
9	閑伊川_-1.5m物揚場	昭和12年度	294.8	ブロック積式	-1.50m	+2.10m	—	294.8
10	藤原地区_船揚場	昭和51年度	50	ブロック張式	-1.00m	+2.50m	—	50.0
11	木材港_船揚場	不明	130	ブロック張式	—	+2.50m	—	130.0
12	神林地区_東船揚場	平成10年度	40	ブロック張式	—	—	—	40.0
13	神林地区_浮栈橋	平成10年度	50	アルミ製浮栈橋	—	W.L.+0.3m	—	50.0
14	神林地区_防波取付_-2.0m物揚場	昭和57年度	181	直立消波ブロック積式	-2.00m	+2.00m	—	181.0
15	神林地区_-2.0m物揚場	昭和44年度	55.1	ブロック積式	-2.00m	+2.20m	—	55.1
16	神林地区_船揚場	昭和44年度	50	ブロック張式	±0.00	+2.50m	—	50.0
17	高浜地区_-2.0m物揚場（2）	平成11年度	200	直立消波ブロック積式	-2.00m	+2.00m	—	200.0
18	高浜地区_-4.0m物揚場（1）	昭和54年度	185	控え杭矢板式	-4.00m	+2.30m	—	185.0
19	高浜地区_-2.0m物揚場（1）	昭和52年度	200.3	ブロック積式	-2.00m	+2.30m	—	200.3
20	高浜地区_船揚場（1）	昭和52年度	200	ブロック張式	±0.00	+2.50m	—	200.0
21	高浜地区_-2.0m物揚場（4）	平成11年度	60	ブロック積式	-2.00m	+2.00m	—	60.0
22	高浜地区_船揚場（2）	平成4年度	150	ブロック張式	±0.00	+2.50m	—	150.0
23	高浜地区_-2.0m物揚場（3）	平成11年度	140	ブロック積式	-2.00m	+2.00m	—	140.0
24	高浜地区_-4.0m物揚場（2）	平成12年度	200.4	控え杭矢板式	-4.00m7	+2.30m	—	200.4

宮古港 その他施設 (補助分)

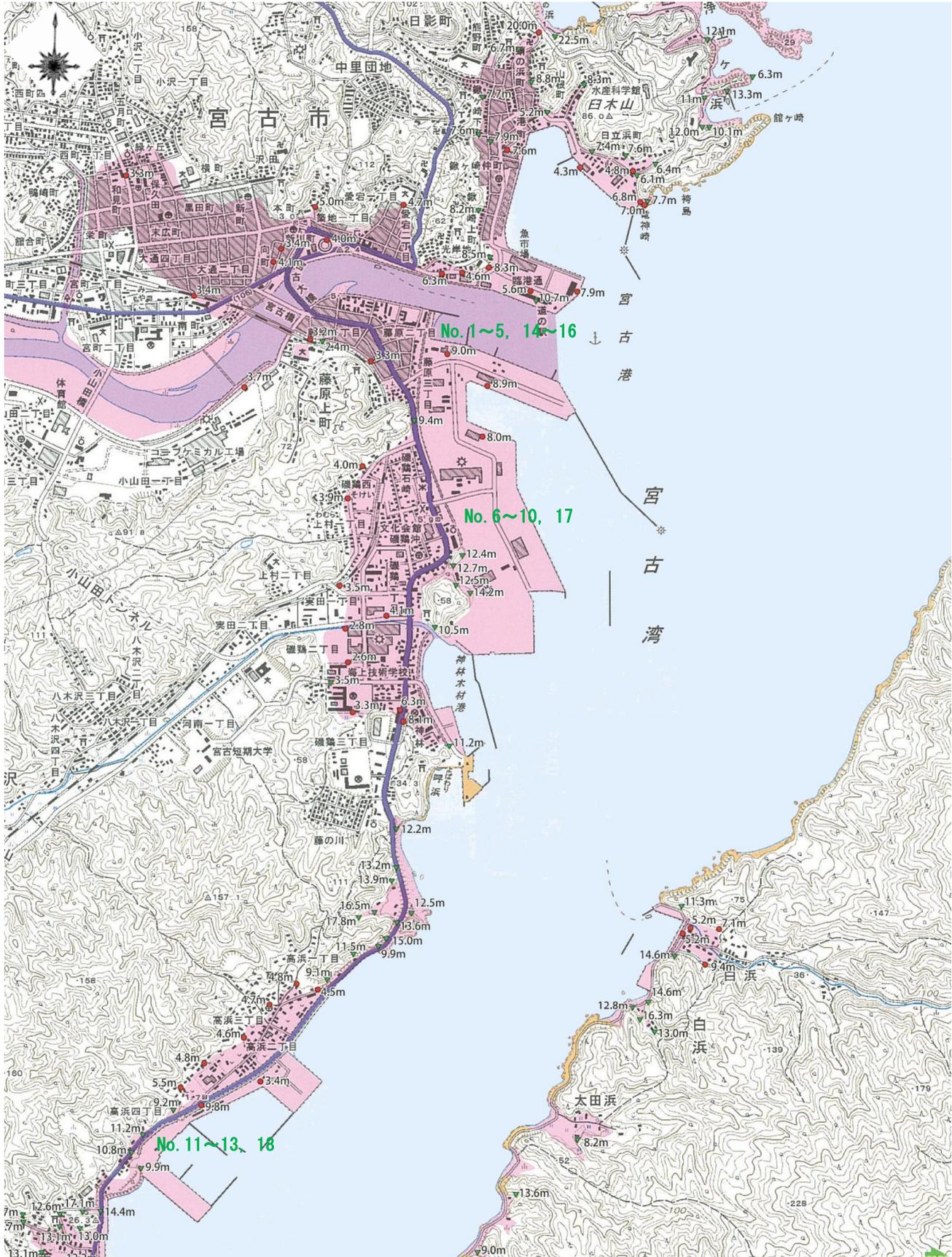


図-3.5.26 宮古港の被災港湾施設 (その他施設, 補助分) 1)に加筆

表-3.5.10 宮古港の被災施設一覧（その他，補助分）

No.	施設名	完成年度	延長	構造形式	水深	天端高	設計震度	被災延長
1	藤原地区_防潮堤（1）	—	—	—	D.L.+1.02	D.L.+9.27m	0.15	—
2	藤原地区_防潮堤（2）	—	—	—	D.L.+3.71	D.L.+9.27m	0.15	—
3	藤原地区_防潮堤（3）	—	—	—	D.L.+3.70	D.L.+9.27m	0.15	—
4	藤原地区_防潮堤（4）	—	—	—	D.L.+3.17	D.L.+9.27m	0.15	—
5	藤原地区_防潮堤（5）	—	—	—	D.L.+3.20	D.L.+9.27m	0.15	—
6	磯鶏地区_防潮堤（1）	—	—	—	D.L.+5.29	D.L.+9.27m	0.15	—
7	磯鶏地区_防潮堤（2）	—	—	—	D.L.+3.96	D.L.+9.27m	0.15	—
8	磯鶏地区_防潮堤（3）	—	—	—	D.L.+4.18	D.L.+9.27m	0.15	—
9	磯鶏地区_防潮堤（4）	—	—	—	D.L.+4.71	D.L.+9.27m	0.15	—
10	磯鶏地区_防潮堤（5）	—	—	—	D.L.+4.74	D.L.+9.27m	0.15	—
11	高浜地区_防潮堤（1）	—	—	—	D.L.+2.05	D.L.+9.27m	0.10	—
12	高浜地区_防潮堤（2）	—	—	—	D.L.+1.99	D.L.+9.27m	0.10	—
13	高浜地区_防潮堤（3）	—	—	—	D.L.+2.05	D.L.+9.27m	0.10	—
14	藤原地区_陸閘2号	—	—	—	—	D.L.+9.27m	—	—
15	藤原地区_陸閘1号	—	—	—	—	D.L.+9.27m	—	—
16	藤原地区_陸閘3号	—	—	—	—	D.L.+9.27m	—	—
17	磯鶏地区_陸閘	—	—	—	—	D.L.+9.27m	—	—
18	高浜地区_陸閘2号	—	—	—	—	D.L.+9.27m	—	—